

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (17)〉

乳児保育実践の省察にむけて

— 戸越ひまわり保育園訪問から —

川島明希子・高坂悦子

戸越ひまわり保育園訪問

去る秋の日に、私たちお茶の水女子大学附属いずみナーサリーの歳児担当保育士二人は、戸越ひまわり保育園を訪問しました。

その日は職員の数人の休みが重なり、主任も一歳児クラスの保育に入っていました。「お散歩しながら、お話ししましょう」とのことで、私たちも一歳児、低月齢六人のお散歩に同行しました。ゆったりゆったり歩きながら、まずはすぐ近くの踏切へ。カンカンカン

と踏切がなると、みんな人さし指を立て左右に振り、「どっちかなー、どっちかなー」と手遊びをしながら、どちらの方向から電車が来るのか当てっこしています。当たると両手を挙げ、「ヤッター!」。見ているだけで笑みがこぼれてしまいます。

しばらく楽しんだ後、「犬を見に行こう!」と出発。残念ながら犬小屋は空っぽでしたが、なんと道路に枝つきの柿が落ちていました。すぐに一人の男の子が見つけ、先生方も「うわー、いいもの見つけたねえ」と、子どもに近い、驚きと喜びに包まれます。そ

の柿をズボンの後ろにさしてもらった男の子は、しつくりこないらしく、柿が見えないからか枝を触って取ろうとし、気になる様子です。「危ないから」先生が持ったほうがいいかな？」との声もありました。子どもも納得がいくように、ズボンの前にさしてみるなど、お若い先生でしたが、子どもの気持ちを受けとめながら子どもと一緒に柿の持ち方や運び方をいろいろと模索しているのが印象的でした。その後は私道らしき所で、踊ったり、走ったりとみんな笑顔いっぱいのお散歩でした。

保育の様子

帰園後は、○歳児の保育室に入れていただきました。まず感じたのは、広いということと、穏やかな雰囲気であることでした。広いのですが七つの仕切りがあり、食べる場、眠る場、おもちゃの並んだ場、広く体を動かせる場、おむつ交換の場などに分けられています。

す。子どもたちからも広く見渡せる空間でありながら、子どもが自ら好きな場を選べ、それぞれの空間に入るとじつくり集中して遊べるようになっていきます。私たちの突然の入室にもかかわらず、子どもたちは少し様子をうかがった後、しだいに近くにきて、笑顔で触れ合ってくれました。

ちょうど食事の時間。食事は時間をずらして交代で行っており、十か月までの人は一対一で抱っこによる食事、十か月以降の人はお座りが安定し、食欲が出てくるとの理由により子ども二対大人一で、いすに座つての食事となっていました。

戸越ひまわり保育園では、○歳児はゆるやかな担当制をとっています。食べる順番は、月齢などでいただいた決まっているものの、その日の朝食の時間や、おなかのすいた様子などにより柔軟に変えているそうです。午前睡は必要のある人のみ、午睡も眠そうな人から誘っています。そのため、それぞれの生理的欲求が

満たされており、子ども十一人、大人五人でしたが、それだけの人がいるとは思えないほど、みんなが穏やかに過ごしているようです。食べている人、遊んでいる人、おむつを替えている人、それぞれ今の時間をゆったり過ごしています。

おむつ替えの場は、マットが置いてあるだけで何もありません。おむつを替えていることを子どもが納得してから替えるので、おもちゃを持たせて気を紛らわせるというようなことはないそうです。子どもの主体性を大切にしていることが感じられました。

場面によって大人が交代するときは、それまでの様子や気づいたことなど、ちょっとしたことでもしっかりと伝達し合っていました。この職員同士の呼吸は見事なもので、信頼がしっかりとあり、任せ合っていることにプロの仕事を見た気持ちでした。

その背景には、こまやかな打ち合わせがあることを後で知りました。

いずみナーサリーの保育

いずみナーサリーの〇歳児は、高月齢三人と低月齢三人の計六人、大人は担任二人とフリー保育士二人です。高月齢児はナーサリーでの生活にもすっかり慣れ、戸外遊びを主に午前中たっぷり遊ぶことで、食、睡眠のリズムも自然に身につけています。遊びを大切にとらえることから、まずは戸外でそれぞれ好きな遊びを見つけ満喫する時期から始めました。今では、追いかけて、葉っぱちぎり、階段上りと、一つの遊びが盛りあがるとすぐにどこからか二、三人が集まってくる、みんなという流れができており、遊びの楽しさが増しています。低月齢児はそれぞれの心の安定を第一に考え、ゆったりとしたペースでその子のリズムを尊重しつつ、でも、小さいながらも友達とのかかわりを大切にとらえています。

次にいずみナーサリーでの保育がこの訪問により変

わってきた一事例を紹介します。

睡眠スペース



○歳児の高月齢グループは、入園したところには午睡の時間になると、ぱたつと倒れるように眠っていましたが、ずいぶん体力がついてきたようで、入眠する前に保育者の顔を見てお話ししたりと、一呼吸おいて眠るようになりました。またそのころ、途中入園してきた低月齢三人は午前睡をとったため午睡の時間にはまだ眠くならず、一遊びしたい様子だったので、○歳児がお昼寝の場所として使用している和室で、絵本やぬいぐるみなどを用意し、入眠前に穏やかに遊ぶ時間を設けることにしました。好きな絵本を選んでばらばらと自分のペースで読んで

り、ぬいぐるみをとんとんして寝かせてあげたりと、それぞれが穏やかな空気の中で充実した時間を過ごすことができていました。

ところが、それまでスムーズに入眠していた、高月齢Aちゃん(女児、一歳二か月)にとってその時間を設けたことで「遊び」から「入眠」への切り替えが難しくなり、「そろそろ寝ようか」と声をかけても首を振って「いや!」というようになりました。

しばらく様子を見るものの、やはりなかなか切り替えられないまま機嫌がグズグズと悪くなっていき、抱っこで眠ることが多くなっていました。Aちゃんをよく見てみると、体は眠くてとっても熱く、その眠気でテンションが上がってしまい、さらに眠りにくくなっているようです。また、遊ぶ部屋と眠る部屋が一緒だったため、彼女にとって眠る部屋であるはずの和室が、遊ぶ部屋の感覚になってしまったのです。

おそらくこのままずっと遊んでいればきつと自分か

ら眠り始めるということが保育士にはわかっていたものの、Aちゃんの体はすでに眠いはずなのに、彼女自身の体の求めに応えることができていない状況に違和感を覚え、職員間で話し合うことになりました。

戸越ひまわり保育園では、午睡の時間になると、奥の広い一角に「午睡スペース」をつくり、ふすまを閉めて、入り口近くの遊ぶスペースと空間を分けていました。子どもたちの眠さ加減を見て、保育者は一、二人ずつ午睡スペースへ連れていきます。そのため自然と、眠る子どもが静かな雰囲気の中で入眠できることが保障されていたのです。

また、遊ぶスペースと眠るスペースが分かれるという、部屋で「遊び」場面と「眠る」場面の切り替えを提示することで、○歳児クラスの子どもにも感覚的に伝わり、自分の体の欲求に応え、スムーズに移行できていました。

この見学を踏まえ、和室前の小さなスペースにマツ

トを敷いて入眠前に一遊びする場所をつくり、眠る場所（和室）と区切ることをほかの職員に提案しました。初めての試みに、スペースを分けなくても子どもは眠っているのになぜ分けるのか、ということも話し合われました。戸越ひまわり保育園の保育の意図を理解しながら、いずみナーサリーでの保育へつなげる思いを共有していく中で、まずはやってみようということになりました。

Aちゃんは最初、小さなスペースで過ごす意味がわからなかったものの、しだいに「遊ぶスペース」であることを理解し、眠くなると自ら和室のふすまを開けようとし、保育者に「眠りたい」意思を伝えるようになりしました。

ほかの高月齢も、和室に入ると、以前よりずっと穏やかに入眠できるようになりました。また、午前睡をしてしばらくご機嫌に遊びたい低月齢は、いろいろなおもちゃでじつくりと遊べる時間ができるなど、それ

それぞれの遊びや睡眠が、より自分自身に開放されたもの
にすることができました。

これからの課題

ナーサリーは少人数で附属幼稚園の一部屋を借りて
スタートしました。〇、一、二歳の交流、「みんな一緒に」
というスタイルを大切にしてきていますが、「みんな」
を大切にしながらもやはり「それぞれの子どものリズム
や思い」を特に〇歳児では大切にしています。

まずはナーサリーという場と、いつもそばにいる人
に親しみをもってもらえれば、あとは自然と周りへと
目が向き、遊具に手を伸ばし、そばで遊んでいる子の
姿を目で追い、そのうちに自ら近づき、触れてみて、
「あー、うー」と何やら話しかけていく、かかわりの
心地よさを知る。こうした自らの育ち、広がりを見せ
ていく世界を大切に思っています。

戸越ひまわり保育園を訪問し、やはりその思いが確

かであることを感じました。一人ひとりの成長、その
ままの姿を受け入れていくことで、子どもたちは安心
して、自らの力で日々豊かな育ちをしていくのでしょ
う。そして、その日々は私たち保育士にとっても、と
ても心地よく確かな保育をしている実感、喜びになる
のでしょうか。

子どもも大人も、みんなそれぞれ、自分らしさを活
かせる場、それが保育の場だと思えます。そのままを
受け入れ、そのままを受け入れてもらえる、その心の
ぬくもり、絶対的安心感が、人を育て、温かな人間関
係の築き、そして、人格の形成にもつながっていくの
ではないでしょうか。

子どもたちの生まれもった育ちの力を信じ、伸びて
いくよう援助をすることが保育であり、そのために
日々のかかわりを大切に、環境をこまやかに用意して
いけたらと願っています。

(いずみナーサリー)